

イランの商慣行から覗き見る経済制度の歴史

岩崎 葉子

2018年6月

「商人たちの旧来の慣行が国家の法的な枠組みの中へ取り込まれることによって新しい契約システムが生まれる。それがさらに法をも変えていったダイナミズムは、社会の中で法がまさに生きている、そして制度もまた生きているということを我々に伝えてくれる」

イランの店舗賃貸を対象として経済制度史を研究する岩崎葉子（いわさき ようこ）氏に著書『サルゴフリー 店は誰のものか——イランの商慣行と法の近代化——』（平凡社、2018年4月発売、272頁、4800円+税）の内容と意義、出版に至る経緯、研究者を目指したい人へのメッセージ等を語っていただいた。

本書はどの社会にもある法と商慣行の間の綱引き、つまり制度と市場の相互作用、そして法と慣習に影響を与えてきた偶然と必然を学べる本である。本書によれば、実は世界的に見るとイランの事例は普遍モデルのひとつでもあり、イラン現代史の展開も取り込んだ結果、比較経済制度史の分析枠組みの構築に寄与しうる記念碑的な一冊となった。インフォーマントの語りの多彩さも手伝ってバーザールの歴史が眼前に立ち上がり、テヘランを歩いている気分になる一冊である。

本書の問いとは

本書は、サルゴフリーと呼ばれる、店舗の賃借人に帰属する高額な用益権の売買制度の歴史的な形成過程を扱ったものです。首都テヘランをはじめとするイランの大都市部の商業地では、店舗の土地・建物の所有権を売買したり、月額家賃を払って賃借したりするようなタイプの商業施設は非常に少なく、その代わりに、店舗の使用人が所有者からその用益権（サルゴフリー）を購入して商売をするタイプの店が一般的です。店舗を借りる店子が、契約の際に、土地・建物を所有している地主からこの権利を買い取り、そこで商売を始めます。商人だけでなく、一般の人々もサルゴフリーの価格には高い関心を持っていて、イラン人にとっては、ちょうど日本における路線価のように重要な経済指標のひとつとなっています。

このサルゴフリー方式賃貸契約を、ごく簡単に説明しますと、このような感じです。サルゴフリーを購入すると、店舗そのものは賃貸物件なのですが、法律上、店子にはたいへん強力な権利が与えられます。というのも、店子が退去する場合には、この物件のサルゴフリー相当額を、地主が時価で補償しなければならないことが法に定められているからです。

また店子には、このサルゴフリーを時価で、（地主ではなく）第三者に転売する権利も与えられています。ただしこれには、その誰かは必ず「次にここで商売をしたいと考えている人」でなければならないという条件があります。

サルゴフリーの価格は、一般にたいへん高額で、場所によっては所有権をまるごと買ったときの値段とたいして変わらないような物件もあるほどです。また、時価という以上、サルゴフリーの価格は不断に変動します。つまり、その店舗の集客力が大幅に向上するような事態になれば、サルゴフリーの相場がググッと上昇するのです。

一方で、サルゴフリーを売却してしまった地主の手元に残った所有権の価値はきわめてわずかなものになります。地主はサルゴフリーを売ったあとでも所有者であることには変わりがないため毎月の家賃を受け取ってはいるのですが、この場合の家賃は、通常の月額家賃の水準にくらべて破格に安い。しかも、一回家賃を設定してしまうと、その後いかにサルゴフリー価格が上昇しようとも、それに応じて家賃を上げることはできません。そのため、地主の手元に残った所有権の価格も甚だしく安くなるというわけです。

このように、「サルゴフリー方式賃貸契約」というのは、その店舗で実際に仕事をして利益をあげる店子に非常に有利でかつ強い権利が保障されている契約です。現在のイランの不動産市場では、この方式のほかにも、普通の「賃貸」や「所有権売買」の選択肢も立派に存在します。普通に買っても良いし、借りても良い。ところが、テヘランの店舗の7、8割が「サルゴフリー方式」で賃貸されているのです。私の根源的な疑問は、一体なぜ、この方式だけが突出して採用されているのか、ということでした。

なぜ「サルゴフリー」が最適だったのか

答えからいうと、実はこんな「いきさつ」がありました。今から百年ほど前には、サルゴフリー

は、店舗の店子同士の間で（場所を明け渡す見返りに）インフォーマルにやりとりされた金銭のことを指し、それは特別に良い商業地だけに見られた商慣行でした。第二次世界大戦中にイランにお雇い外国人のミルスポー博士というアメリカ人がやって来ます。イランの財務総監となったこの人は物価の安定を至上命題と心得ていましたが、インフレを助長しがちなサルゴフリーの慣行に眉をひそめ、これを英米法風に法制化してしまう。すると、もともとイスラーム法に基づいて定められていたイランの民法体系のなかに、所有権とか用益権とかをめぐる異質な外来の概念が混淆してしまい、これが思いの外大きい社会的混乱を引き起こします。

この新たな法律の枠組みのなかで、店子と地主が資産や収益を守るためには、実はサルゴフリー方式が最も適していました。事実上、他の選択肢はあり得なかったのです。たくましいイランの人々は、問題をはらんだ法制度の下で最大限の努力と調整を重ね、その制度の不適切な部分を変形し、法律の条文を変えることなく新しいサルゴフリーのシステムを作り上げていきました。

そこへ今度は1979年のイラン革命が起き、イスラーム法学者が政治の中心に座ります。従来このミルスポー法制を問題視していたイスラーム法学者は、革命の機運とともにこの法制度そのものの改正に乗り出し、またもやサルゴフリー関連の法制度が変更されます。しかしよくよく見てみると、革命後の法改正はミルスポー博士以前のサルゴフリーを復古させるものではなく、第二次世界大戦後にイランの人々が実践して来たシステムを踏襲し、それとイスラーム法学との今日的な整合性を追求したものでした。

このように、サルゴフリーをめぐる物語は当初私が考えていたよりもずっと複雑で、イランの現代史上の様々な事件と関係がありました。それは単にイラン固有の文脈でのみ意味がある物語ではありません。イランというイスラーム世界が「近代化」の過程で直面した、所有権とは何か、所有者とは誰かといった、おそらくは多くの後発アジア諸国が経験した伝統的な価値体系の一大転換であったという意味で、非常に普遍的な経験であったと思います。詳細は本書を御覧ください。

これまで: 歴史学的手法を利用した経済学的分析

なぜイランを研究しているかということ、それは中学生ごろにまで遡ります。1979年のイラン革命を見て、あっ、革命って今でも起こるんだ、と驚きました。当時の多くの小中学生の例に漏れず『ベルサイユのばら』を愛読していて、歴史上だけでなく現代の世界でも革命が起きているということにびっくりしました。それと、「（日本においては）メジャーでない外国」、希少価値のある外国にも興味がありました。そこからイランに興味を持ち始めました。

アジ研に入所後は経済学で苦労しました。今から思えばもともと経済制度に関心があったのですが、経済学の知識、学問的バックグラウンドがないために、自分の関心はこういうことだ、と的確に言語化できなかつた。大学ではペルシャ語専攻で、経済学を勉強したわけではありません。アジ研に入所後の最初の3年は暗中模索で、新人研修で初めて経済学をやらされ、そこでマイクロ経済学、マクロ経済学をひとつおろし勉強したのですが、当時はあまり面白いとは思いませんでした。

でも、2年間の海外派遣でイランに行って帰ってきた後、経済学を自力で勉強し直して、自分の関心はこれだ、とようやく概念化できるようになりました。

当時のアジ研にはボランティアでチューターがついてくれるような勉強会が沢山ありました。イランから戻ってきてからは、プロに習うのが早いと判断し、経済学畑の同僚たちから最新の良い教科書や、勉強法について助言を受け、経済学（の各論）をやり直しました。今の主流派経済学にはいろいろ不満、文句はあるものの、経済学的な分析概念は非常に優れたものが多く、他の社会科学に比べて、自分の切り口としてはこれがしっくりくるな、と思っています。

とはいえ、私に関心を持っている経済制度というものは、長い時間をかけて形成されるものなので、ただ断片を切り取って分析するタイプの研究アプローチでは制度の真実には近づけない、明らかにならないことが多いと考えてもいました。イランから戻ってきて経済学を勉強し直して10年ぐらいつと研究を続けるなかで、もっと歴史的に長いスパンで分析する必要がある、そういう総合的な分析をしたいと思うようになりました。

その分析アプローチの助けとなったのは、歴史学です。じつは私の学部・修士時代の指導教官は東洋史学の先生だったのですが、今思えば、その時に受けた指導が現在の研究のための基礎訓練になっていて、役に立ったと思っています。

歴史学は実証の手続きが大変厳密な学問です。きちんと史料批判をしているか、あることを主張するためには何が揃っていないかならなければならぬか、自分が使うデータの信ぴょう性はどの程度あるのか、そのデータをどう使い、どう引用すべきなの

か、そしてどう注釈を付けるかまで、その一連の手続きがとても厳しいのです。大学時代にそういう訓練を多少なりとも受けたことがあったので（当時はあまりの厳しさに及び腰だったのですが）、後年、もう一回初心に戻って、ああいった歴史学の方法論を取り入れながら経済制度の分析をしてみようと思いました。

経済制度史を研究するための資史料は多岐に渡りますし、数量的なデータだけでなく、法律やイスラーム法学の多くのデータも総動員しないといけないので、時間がかかります。そしてある程度地域についての教養も求められる。そういった総合的なアプローチが自分は好きでしたし、歴史学の方法論を勉強していたことは、とても良かったです。

どうしてこの題材を選んだのか

それはイランの商業地でフィールドワークをやっていたときにたまたま出会ったものでした。なぜ「サルゴフリー方式」だけが突出して採用されているのかという疑問に突き動かされながら、長い、長い謎解きの旅に出てしまい、18年もかかって、ようやくこの本を刊行するに至りました。

でも、最初からこのサルゴフリーというテーマを突き詰めてみようと思っていたわけではありません。どうしてサルゴフリーが隆盛を誇っているのか、どうして所有権を買ってしまわないのかという素朴な疑問から始まっていて、そこから掘り下げていったらじつは結構な鉅脈だったと思います。サルゴフリー、つまり「店は誰のものか」という研究テーマはイランの現代史とか、イスラーム法の今日的なあり方など、かなり幅広い背景を

持っていたからです。そこはラッキーだったと思います。今もいくつかのテーマを並行して持っていますが、それらがここまでの鉅脈を持っているかは分かりません。

経済システムというのは、経済合理性だけで変容するものでもなく、説明できるものでもない。歴史的な経路依存性があるし、「サルゴフリー」には「サルゴフリー」なりの必然性がある。つまり、人間社会の経済システムのあり方は、そんなにスタティックなものじゃなく、文化と絡み合っています。いきさつ、しきたりも背負っています。「サルゴフリー」もそうだろうと思います。

自分が何を面白いと思うか、何に魅力を感じるかは、昔からそんなに変わらないですね。学生の頃から変わらない気がします。私は「商売人のしきたり、業界の慣行」といったことに興味があり、明文化されていないけれど、でも皆がそういうものだと思っている、受け容れているような、自生的な経済システムに関心があります。こういう明文化されていない制度やしきたりは、研究対象としてもきっと面白いだろうとずっと思っていました。

イランのバーザールも、経済合理性はおろか慣行だけで回っているような世界に見えますよね。そういうところはたしかにある。でもよくよく分解してみると、それなりに合理的なシステムでもある。ただ、「商売人のしきたり、業界の慣行」といったものはその時代の人心のあり方と密接に関係していて、いわば時代性を反映しているでしょうから、いずれは変わってってしまうものです。そんな、歴史のなかに消えゆくものを、しっかり書き残しておきたいと思っています。

出版まで

出版社を見つけるのは楽ではありませんでした。自分としては、きちんとした学術出版をやっているところで、自分好みのところ、などと割とこだわって探しました。最終的に平凡社からの出版に漕ぎ着けるまで、それぞれ完全改稿したものが4バージョンくらいあります。いろんなプレゼンテーションをやってみました。1つは研究が進んだ順番通り、つまり自分の思考過程をそのまま辿って本を書く。これは良くない。エッセイ風にも書いてみました。これも良くない。

本は決して論文ではありません。全体の流れを俯瞰して、自然な流れにすることが重要なので、私は何回目かの書き直しの際に「エピソード・カード」方式を取り入れました。こうやって構成に苦心、格闘するうちに、博論を書いてから9年が経ち、その間に新発見のデータもかなり付加した結果、博論とは似て非なるものになりました。こうした試行錯誤を経て、最終的に本書の構成となり、これが一番気に入っています。

私を担当してくださった編集者は自由にやらせてくれました。ただ、できるだけ大風呂敷を広げましょう、と言われました。大風呂敷、というのは狭い範囲の専門家だけでなく一般読者も巻き込んで、という意味です。私自身が、どんな人に読んでほしいかといえば、経済制度に関心のある人です。法社会学、法人類学といった専門を持つ人にも読んでほしいです。それから、イスラーム世界と聞いていまひとつ具体的なイメージを持つことのできないインテリ、読書人に読んでほしい。また、書店のどの本棚に置くのが良いか難しい本だと思いますのでどこに置かれるか、興味を持っています。

この本は爆発的ベストセラーになるとは思えないし、そんなには広がらないかもしれないのですが、読んだ人の印象に残って、細く長く売れるようなロングセラーになってほしいと思っています。また、文字の組み方、判型、デザインといった本の体裁については、だいぶ担当者の方にお任せしました。きれいな本ができて、良かったです。

本書から得られるレッスンとは何か

本書の最後にも書いたことですが、物事の断片を全体から切り離して、そのクリアな属性を分析することこそが「科学的」という20世紀的な学問研究のアプローチに対して、そうじゃない、事物相互のインタラクションこそが創造と発展の源だ、と言いたいです。

研究者を目指す人へ: 「好き」を手放さないで

研究者は、ともかく勉強するしかないと思います。けれど、このテーマなら論文が書けそう、学位が取れそうということではなく、自分自身が興味のあること、好きなことを突き詰めて、まったく新しい「ジャンル」を確立するような人に出てきて欲しいです。そういうオタク的な人が登場すると、その後、それだけでひとつのジャンルが確立しますよね。先人が積み上げてきた研究を勉強することはもちろん大事なわけだけど、その延長線上で仕事をするだけではつまらない。ああ、これも学問になるんだ、という全く新しいタイプの研究に魅力を感じます。

もちろん、目の前の課題や「(手持ちのデータで)できるテーマだからやる」といったタイプの

研究、「あなたしかいないから、やってください
ね」というまわりからの要請に応じることも渡世
には必要ですが、自分が「好き」だということに
執着し、手放さないことが大事なのではないでし
ょうか。■

（取材と構成: 佐々木晶子、高橋学、町北朋洋、
2018年6月4日、アジア経済研究所）